市立函館病院はダヴィンチ手術が100例を超える

消化器外科に続き、呼吸器外科、婦人科、泌尿器科でもダヴィンチの手術を開始。今年10月末で累計104例に達する。

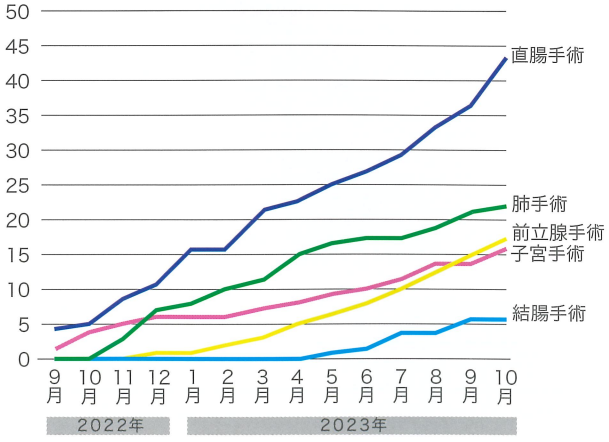
市立函館病院消化器科外科科長
ロボット手術センター長
笠島　浩行

市立函館病院（森下清文院長）は内視鏡下手術支援ロボット「ダヴィンチ」を用いた手術が100例を超えた。同病院は昨年9月5日にダヴィンチによる最初の手術を直腸がんで実施して以来、消化器外科に続き、呼吸器外科、婦人科、泌尿器科でもダヴィンチの手術を開始。今年10月末で累計104例に達した。104例の内訳は直腸手術43例、結腸手術6例、子宮手術16例、肺手術22例、前立腺手術17例となった。

同病院の消化器外科では直腸手術と結腸手術で約50例を行ってきたが、8割以上は笠島浩行医師が執刀してきた。笠島医師は「今年8月以降、病院全体では月間10例以上のペースでダヴィンチ手術を安全に行なっていますが、今後は更なる症例数の増加が見込まれます」と話す。

「腹腔鏡手術では骨盤の中にある直腸の中・下部は難しい場合がありますが、ダヴィンチを使用すると精密な操作が可能になりました」。鉗子を直線的にしか動かせない腹腔鏡に比べて、ダヴィンチの鉗子は360度動かせることは術者にとっては大きなメリットになっている。

直腸がんの手術で問題になるのは縫合不全の合併症である。「年間数例ですが、腹腔鏡手術では縫合不全が発生していました」。笠島医師は直腸手術のほぼ全てをダヴィンチで行っているが、昨年の9月以降、現在まで縫合不全はおきていない。笠島医師は「母校の弘前大学の消化器外科も縫合不全は明らかに減少したようです。繊細で緻密な手術ができるダヴィンチは合併症も減らす効果があることを期待しています」と話している。

「ダヴィンチは合併症も減らす効果があることを期待しています」と話す消化器外科の笠島浩行科長

市立函館病院のダビンチ手術累積件数（部位別）